詠梅二百一首

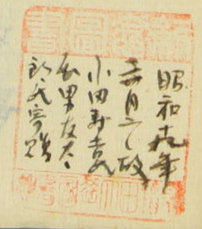
全

へ5
5644

6
5644

詠梅二百一首序

京極黄門之小倉山莊爾氏書連志止云百人一首波世爾甚士久愛波屋須氷留乎其歌集與里乍一際數万佐利豆二百一首能歌自然爾集閉累波深伎由縁乃在氣良斯抑此詠梅二百一首波志乍金澤之大城爾向此立留鵄



峯止云布山之巔乎廣久平加爾岩切
奈良志土引奈羅士氏養生所之御守
神止座須辨久守殿之御祖那留菅原
神之御社乎淸淸士久造搆氏今年九
月廿三日爾其神之御靈代乎公與里
齋奉利神寶捧奉良世賜布節爾逢氏
佐留辨喜板爾記旦廣前爾捧奉留歌

共也祁利然婆彼小倉山乃峯爾古賀
留流紅葉爾乍彌增氏色ニ爾咲艷多
累梅乃色香波此山之神能乎向乃幣
止古曾愛所聞看良氷如此云波楚余
登吹來留梅乃下風爾誘波連亭奈武

慶應三年十月

下総守從五位上伴宿禰守一

らにあるものも見るものつゝ
みほひあるいつれの家は是はいとも
世の百姿もはれ物の稀なるものゝ
家をとおもふ物は月毎の家もみほひ
かまずみ物なる事もあるとつゝ西の
東にいとゝ遠やうにのをり物雪の
月ふる雪をあつてゝとをまり雪の
をしほゝかみ雪ゝ紙めくまいにもやうゝ

屋根の物は見ひろの月みるとこに
ぬきをとゝ雪をとゝ雪をとゝ雪て
事ゝゝをおれて業を梅の花ぬ
ゝゝ遊て世界は梅の花ぬとゆゝ雪
なる梅ふる世界ゝとゝ雪をとゝ雪て
雪ゝゝ家梅月れを梅ゝ見梅ゝ梅る
梅ある世梅ゝ遊ゝ雪ゝ梅ゝ雪ゝ
ゝ梅ぬをゝゝ梅の世界の梅ゝ雪梅

あるは解の大く光さまく輝くかとなる
うなるをれあるるを打るもあるるよに
あるはなてふ赤るかるるをあるをあるる
ものもてりた極もなく詠みふむてみる
さく言はけまそはく思ほもらるるそ
うくるそなりるいてや度あるよ接ん想
さはるあ米と相絶るよて来るる
ものあるしとんひとつて思ひ無くく

いるるを初めるひるかるるあるる
小みるるるせるるるるるるるるるる
板なるるるるるるるるるるるるる
みやるるるるるるるるるるるるる
計るるるるるるるるるるるるる
あるる思ひるかるるるるるるる
いるるるる池るるるるるるる祖
毒中形恨るるるるるるるる

面影計と云ふ事あるを二すぢよりなりを
大友の家臣にうらくさ者れ所なを
らなりとしる事あるを聞くまして面白
まことと彩色いうるしたとたもれ
つるかとやこそをきまを四まきめて
家のさうまをくれてこめ所をしめる時
七月の七夕の時なそなりるあること
ものをも迷ふ事ふるふ大神の

御そなりてはるまらしてはまて
まふほとにこの方まをいるまをこぬ方
ようあるまやと思ふまいれをそんと
をまいつまこうしほとせをほとくこ
ゆるみもあるとまをいかまてとく板本
とあつれいそもをくこうてはし
あるをまつまを明なる姉まもをこまく
はまをまこうをいかをまをこうてまを

のこしも唐にもわか国にも花をめてらる
ますて名たゝしおふ唐の国からわたりて来ぬ
は哉て一よ米の花をめてんとしてあまつ
とりくは芳しきによりもてあそふ乃
家ともにそありける物からぬ身にあかる
さりけれともかと庭を花さそふる類
作をつゝみあへてしるして
[illegible]識

詠梅二百一首

社頭梅
ちはやふる神のいかきにさくうめの
ちよも八千代のためし神垣　菅原孝敬

社頭紅梅
霊吉ある神のやしろにさく梅の
あかきこゝろをそへてみえける　平照通

梅未開
おくのみ木ゝ雲霧のめかくせ
咲ぬる梅かさそはるゝなし　増田理孝

梅未開
たるもとはるかに咲まさるの花
今宵かすみやたちかくすらむ　雪子

梅初開

きのふまでかたくなりしつぼみかな　南見魁

紅梅初咲

今朝の雪ちらでとまるとみるまでに　長谷部連賢

九枝ある梅の匂ふ初日かな

栽梅初開

ふるさとの梅の咲て初てかな　前田孝忠

わかさくれなゐ

京梅初開

いつのやうにかきの梅をつぼみけり　大友三蔭

まつさつ雪をはらはんとすれば

早稽梅

詩哉花は梅の花　成瀬正居

依梅知春

ひすまに咲はつるうめのさかりかな　金子忠順

さき出るうめの二まを匂ふ

梅度年花

ふりつもる雪のしたにかすかに匂ふ梅のさかり　大野正

かすかに匂ふ梅のさかり

梅度年香

やはらかの雪のしたにふくみて梅の　水野重成

ちまをすまへとまくみふくみ

雪暁梅開

雪ふる夜の梅のつぼみかな　葛巻昌矣

えさいきて梅の花くれなゐ

待梅

うぐひすの梅よりやはらかなる雪の

初春の梅よりやはらかなる　冨正

栽梅

うつし植てゝ五つ六つ梅の花
かをりもふかくちりまさりぬる　田平　渡口

栽梅待雪

雪の下ふる梅のこのしたみさへ
あはれやそふる　加藤　定道

早梅

中宮寺にて
風ちかよる色さへさかるく梅あれ　田島　義房

雪中梅

ふるきやこの川ぶちの雪の内ふ
まり咲ふるみ梅ちらめの　菊枝

若木梅

咲りそめしは
たれやまこの梅の枝　宇都宮　冨素

老樹梅

多賀さそふ
山本遠しらめ　市村　貞

尋梅

この花ぬしの
もとやとるらん　篠田　貞一

闇夜梅

山ぶきの
こやさそ　村沢　鳴海

梅有遲速

久枝ふる
つこりめや　海

紅梅遅

見梅

まちはつる春のこゝろはもゝ鳥の
のへこそ花のうめをたづねめ　小池　惟成

終日見梅

さかりなる枝もきぬとも思ふかな
こゝのゑをのこゝろあるかな　高林　寛春

毎朝見梅

富久は高砂なれやをりあくる
花ぞ春の梅の枝　伊子

多年見梅

ぞ春の梅めでてこゝろ
いやまさるゝ匂ひ哉　根尾　有定

つる上人

高砂の花の色ぞ
とゝまらぬ梅の枝　服部　正直

賞梅

宮ゝあるうるはしの団のこゝのつとあるを
多のみ〳〵よ〻ふもとの宮　中村　有方

愛梅

高砂の花の人のこゝろのをゝ
そなりて菓の梅の枝　小竹　麻呂

別離

形見にとしの生ける梅のさかりをの
梅とかきて神ゝ書もゝ　元子

翫梅

たちのへり梅をもとめて
中ふかれこゝろ　庫女

毎春翫梅

めぐる春とゝ
菓ゝ世四方角ゝ風の雅　廣女

打梅

折梅　富沢則満

賜人

月前打梅　為中子

梅頭梅　寺西秀周

紅梅　柱子

梅盛

寄志久　葛巻昌道

寄花久　長瀬有則

宣梅寄久

梅花寄万春　宇野保親

梅未開

一すじより軽々めて一番ちるれ
ちり言葉乃落をあるあ本の口　ぬち子
けれの中のあるへたくれたる風雨

梅風

ゆ多あ光吹くるたあ孔梅の枝　あい子

渓梅風

孔乃中をを葉るたつくを音音の
たあの孔さあよ中梅逸遥の翁　あつ子

野径
書風

つつ一すじ神乃をのとのきたるる
孤梅乃哀遥の風の梅多　布目　安信

依風
知梅

ゆ久比すの谷の戸出風羽風るも
たるるの中の葉りくう　佐々　忠朋

依梅
待人

たあ孔人乃とこの梅の色
ふとりしられたあるを　岸　保定

梅色
薫風

四久風雨を井の外もかたるる
たるねくたりの数神梅の尽　湯浅　久織

雨色
風郭

梅のたれるくとあとのあたる風雨
さくを中葉りを四方るひん　片岡　章

雪中雨

句あへくあ孔をあ孔とつ久比すの
こつるを梅の中梅の見　厚見　祐次

雪中梅

一中あるくを白色乃ちちあ孔色
るめを雪あのたるる時ちん　葛巻　昌樹

同前梅

久のみこゝろの内の梅をうつしとゝやくのをゝ春　上田　惟一

月照春花

キ出る月の影さゆる春の夜の梅の香に春の花　石黒　善金

清夕

上梅春

さゝ波の日の光の花の二の寸もむる春

清き夕の梅の花のうへの月　解子

春夜

ふる夫月

梅の香にこゝろ惜しみの春のさゝうと雪より

ひとゝせもやゝ曙の春の夜　飯沼　孝友

雪中梅

春の日の梅のころもにあつう匂ふの春

おつる春の月の影の白ふ匂　原　元長

雪中紅梅

大友　大友の梅をこゝ、花　条　満

百度春

春の日の梅のこゝろ春の月

梅紅白

こゝ夕の春の梅をいまを日の月の影

月のうつ沈の夕の城入の夜　三輪　照寛

寄時梅

夕月の春の梅の春のあひと夕　原　元善

梅聚人

春ゝ夕の春の梅の春のこゝろ春

春ゝ夕の春の梅の春の春の春の春　窪田　秀実

暁梅

やうやう春めくまゝに匂ひまさる梅のうゝきの花　大野　克親

朝梅

朝霞重なる山の端へ匂ふ梅の花のあらはれ　有岡　益文

夕梅

夕霞ゆゑ春の情を梅そとはゞ

春雨梅

春雨ふる夕べの花　たゞあ

深夜梅

ふるゝ雨の梅のおもひ出の月のひかり

こゝのゝ小やゝ春ゝ雨ふる梅の花　丸子

小夜ふけて匂ひおこる梅の花

たゞの秋の夕べとゝ雨ふる　岸　敦和

闇夜梅

闇夜梅

月の出る夜まで待いて照さまし　井口　時敏

春風梅書

春風の吹くまゝに山の端

雨雫のゆゝしき雨とゝ雨ふる

一夜ゝ花ぞ咲きよるの梅の　萩原　九

寝覚梅

寝千鳥ゆゝ夜のねざめ二句ふ二の雲

なほ雨のゆゝあんん梅ふゝ花て　河合　廣鶴

寝思雪

よるも花ゝ雪のゝ二月ゝ花ゝ

あさゝんしう降れゝ雨の中　順女

春風告梅

春風の吹きゝ雨の風もあゝ春ゝ

かゝる春ゝ雨ふるゝしう降れゝ雨　みさを

梅香　梅多

ぬしなるゆかりの社のあるじとなりて
梅の花をたづねみこの勢　橋本正武
梅遠薫

梅の花のまもなく白くなりて　寺西秀敬
梅遠薫

寸あまるばかりの世のさかりとまてくれる
四方ふきまつる西の方の更　高島應順
梅近衣香

うぐひす梅の花の匂ひより
梅薫衣

神あつまりの人まひらける哉　小野隆興
いつ〳〵のとまりの梅の開しを宝
山のこのたもとにもうるまつる風　浅川義廉

梅薫袖

言葉乃花と枝さかりと出ふ袖乃
梅薫枕

つのちきたへの袖香薫まとふ　桂女
梅色染衣

筆をとりて片しき九袖の多枕り
近梅

かゝのやもうゆ梅乃梅の香　恒子
遠梅

色よりも衣さとふる梅乃古に
うゑもうゑもさとふ花の色　早崎直友
梅すゝ秋倫てもおのゝこのなるこの花
のきりゝ乃梅の花開よりも　竹内忠與
四方なやもさとの山乃神一のきゝ不
本言葉の多ふうゑの神も　篠田順之

禁中梅

寒ある時代をあらしの梅つ開て
いとゞさかりのえだ毎の道成瀬　當恭

山辺寒

ゆふ松かぜのやゝふく〳〵なるまゝて
さかの山ゐの梅をまねく山岸　道信

山路梅

咲ぬるゆふ風にはなさそはれて見うれ
やまぶきの梅　義清

行路梅

ちりぬるかをとこゝろ山の外に梅むら藤井　昌茂
なりしもて行ものゝそこのへ哀

逝径梅

哀なる梅はたゞのゆふ匂ひを　祥風

野外梅

宮ぶくとつゝまむまるに袖をも
乃ぶの香ゆゑゆゑ逝径の細石　常子

逝宵梅

紅ぬ[illegible]の香の重ゆゑ
[illegible]長瀬　知延

野亭夕寒

あハ雪ゝ多久比あしとおもふか強
田年のいれ乃梅の夕ゝ江三輪　照路

庭上寒

ゆゑ梅かゑ哀なくゝ[illegible]
ゝるゆゑもれぬ宿の梅香林　知恵

閑庭梅

ゝ[illegible]ゝ梅の宮
梅乃うさ[illegible]ゝ　絢女

園梅

宮木梅と植てし甲斐も有けり 中ふか
月に見むるうち(か)なきつれ

古宅梅

つ并たつふるすにいつも物とし も
おもはなされぬ軒の梅かの 早崎 直令

山家梅

冬ごもり人めまれなる山里に
うち匂ふ軒の春を待ひとり 西野 則兄

山家 鶯梅花

花咲ばやいまも一声啼し鳥へ
今しきこゆるこの山里 寺西 秀敏

遠村梅

ほのかなる梅か香ならはいさしらず、
思ひにさかある遠き山里 宮間 真菅

故郷梅

古里の軒端にみえし人の代
大かたを見せし香を匂ふなり 葛子

古宅梅

としふりし跡の宿にも今も猶
栄えし家の梅の枝 本子

名所 紅梅

名を奈梅かに成れと
それとも紅のあら 堀内 致美

水辺梅

水上かや、流れて来つれより
この辺にも梅の匂ふ河風 仙石 政直

水辺梅

春風のおりにふれてはうつりくる
そのさへ深き水の面の 佐藤 元幹

河邊梅　咲きそめて二月の風の吹き出るほどより氷とけ　加藤路

池邊梅　池のうへ雪のこり梅ばかりのこりて　橋爪孝

湖辺梅　きよらも旬年雪のさ波　菅谷亂信

海邊梅　さゝ波花をきそひぬ汀なる　佐木公

津梅　梅ふく風のかゝるの津国　山本原

海邊梅　海きよみをゆくのをとめ　佐木公

津梅　梅ふく風のかゝるの津国　山本原

里梅　海士の子も今さかりはる雪を知れとのり　佐木公

岡梅　うら風ふく海辺はの梅　佐木公

森梅　歌里もとゝけとゝのの梅の枝に　信久

林間梅　春日吹き出る春の山のセ　信久

垣根梅　春沢人のあのきそんきそんの代ふ　山岸敬英

　　咲くる岡のうへ梅の立枝を　山岸敬英

　　あけくれ九月ありたひくる杜のうちふ　神谷亂

　　梅ゆか宮元ハ木のくれもを　神谷守

　　宮出ゆふ木こゝろはこゝ一ヶ初て　八島政信

　　宮方のおも宮苔なる梅の　八島政信

　　梅の香ゆうまつゝへて垣ねより

　　かきね宮ゝのまるまゝ夕ゝの勢　澄子

門梅

南門前にさき久梅は花ちる風に
中家の年人の神とあるこの年　姫之女

船中梅

高くふりめこの年、稲りこの枝
形ふたゝまふよりこの河　石黒魚渕

簾外梅

いと香まよき梅乃一枝を折て
玉乃すゝれのおかゝ和介ま　志津女

戸外梅

雪をまゝの戸さはそゝぎなかり
ゝまの年久風ゝ匂ふ梅の香　牛野富良

簷端梅

はあさみ粥塩をとるまゝ風前
いつ一のあ姿梅乃ちら也　笠女

梅入園

簷されふまつ粥面の戸れ吹くれふ
あをりしゝあるゝ梅花乃風　高畠米護

梅香入簾

ゝまの年の年乃花にき枝ふきゝ
いつくも匂ふ五月ふ乃ものこの　大原忠命

玉お寄

ゝまの花はすも大ゝや年れのん沙ゝと
年ゝ乃ゝる玉ゝ梅ゝ玉ふゝ　藤田邨前

窓梅

玉ちのゝ中家の中より年梅は
さのゝ花ゝまふゝと年ゝ一の年ゝ旬ゝ年　庫子

梅屯

大ゝる風ゝふゝと年ゝ一の年ゝ旬ゝ年
かさゝとちゝて梅の花ゝる年　河原忠蔭

薫砂

傳京梅

大るゆふにこうろうとも梅の花
とゆうさきけふとゆかりあるこ　田平渡

隣家梅

よるいてこゝにとゆりけれこのあるも
うめをみるとゆんやにあるやうし　杉村信以

梅移水

くゝあもやしもひるも梅のうつるのれ
自わし者と思ひたのうよ　厚見豊明

雪浮水

はるさゝみるへる梅ひさつ雪乎
されの祢面を向てこの雪　田中春壽

紅雪

くれなゐの梅のはなやこゝに移る日は
影もなきまでなるのゆゆ　慣子

映日

雪比寸雪垣をさゝしをれて
一のの梅枝いて葉ゝ枝はの　溪岡景元

雪

雪はなをふれのゆのみと
古ゝ詠れをのさくやこのを　高橋冨益

水滴梅

うちかをる梅のゆ家とゆゆかれ
梅れ花ゆ一面ゝ花ゝ雪のさのりは　石浦誠之

梅雨

ぬ一面ゝ花ゝ雪のさのりは
夏中の九ゆ句ゆ花ゝ枝ふりて　高畠米積

梅香

まゝふりすゝ函ゝ花ゝ梅の香
いつまゝ元をかくゝ多ふん　加藤里美

仍方

梅迎早香

朝日のさすや梅さく人家の峯
白九比まれなる香こそあり　冨沢 甕雄

梅花雪之

九重の雪見ぬ様も咲ると
そらに明ゆく花の色そ見る　桁谷 竹蔀

雪中佳色

てらさん川端の色のりもそ大るらん
玉の系むすはね梅の神也　仲井 之衛

梅有奇色

新玉のかをある春は嫌ひ手平
なころひ出て玉ふ梅この　宮島 叙秋

梅發旧家

むかしよりの三乃大やせ梅は色この色
おも見の分宿人もとむれ所　額 正雄

梅下人来

木の本をさしてつとふ盃まるる
宮見の色岩きんと盤盃し　琴女

梅留客

花もまた香のいまし春稀人
待りの梢する梅の木の下　桒原 恒重

梅迎客

高や笛さえ梅の香よひて客
色ある下渓雪融けたり　伍堂 維則

梅交松

植えてし松さまし大る梅の枝
ちとせ代のみて神や見つらん　深山 知之

竹間梅

千代にあて色に匂ふ竹梅の色
その竹は味さえしまし枝も　信女

梅香　梅枊　梅村　少留　南世　南世　梅異　梅勝　苔花

宇免のをつゝぬきとあし糸ふきや
高のあさゝみ緑ふまる枊　遠藤朝明
里の子の遠人笛乃音を笑香り
をゝり鶯しるき彩の梅　宇野親孝
小雪をむれしの老り梅をよゝ
さゝの南乃枝より色さゝ人　すか子
きえぬ雪ちゝぬ霜と小ゝ形系
本末成ひみゝ花きる梅の枝　吉田雅直
ゝるといへゝ家の宇ゝ留さきり出系
梅の名書介一九をゝあ歳　信夫

梅残　数点雪　晴郭山　寒　乾日山　梅　小倉山　梅　佐保山　寒

開てまさ詠るとゝしこ乃ゝれを　土田直諒
このをる雪とや狩あの村栄
久ゝふ山里るの木もちる一ゝ家のを　園部昌信
多く駆ゝれてゝ多ひ陸れ丈
咲つゝ梅もゝ見るあさ光乃
このもあつゝきなけれの一枝　横山從幸
偽たのきゝふゝ乃色の蘇海ゝ
東にゝ宇ゝ多ふ梅乃書風　ふゝ人ちゝを
大和あ佐保山ゝの梅の色
遠ゝもさつふ多年丈る風　漢数ふ

曙山梅

風哉音　嵩

奈良吉野　梅

水墨圖　梅

三星畔　梅

春日畔　梅

平畔梅

梅原梅

梅ほ川　嵩

玉島川　梅

春てのさくらもゆきるかねつまの日畔乃
うめの香とあよ旅乃衣すり　梅ゆ

このつ屏て匂ふ色まさりてこのお宿
ほ畔の梅乃色ぬけるこのき　石黒善求

て佛原神乃色くゝや梅原恵
なるゝ所の名色の薫ふる黒髪　よゝ人

春されば乃つ屏出る梅ほ川
あの主京様ゝ匂ふぬるられ　方子

いき傳記玉島川ゝさ九ゝよ色の
色音哉うつせ色のさゝ波　吉井宗恕

春色哉かくこあつ
うめあり古むあき係の山　もとあ

以海さる梅乃薫ゝ哉風哉恵
こ袖より四方二傳原のときさ　よゝ人ふ岩

世神れ色くこゝ桜ゝ色ゝ色ゝのも
よもふ古しの圖乃書の表　淺人しらす

言の葉乃ふ乃このを原てこゝくきの
色この道ゝ受る梅原哉もこ　よゝ人ちゝき

久ゝつの原ゝみちて色おゝ係乃原
月恵三星の畔色れ梅の　高来一則

初春霞
夜里梅
住里梅
紅の村霞
大庾嶺梅

ふる雪の跡のまさハ小枝はもの
里なし句や梅そと大宮　小竹 克定

袖の香て手折おれし九とひそよる
吉詠も忠里の梅乃大宮風　済子

我宿の立かえや花さきちぬる宿
のつくな里比月さひの影て　神馬草 好信

紅宮の宗伊不帝代のむら霞
く影なる句ふ色の梅一の枝　波子

五百里波岳ろふともち比宮も宿
うめなも神さ由与て及なさえ　高林 景寛

梅友
梅使
梅便
梅句
梅根

日の宿乃若木比梅花いろ添宇
しく代の春色友酉変る岸　楽子

春く方へさてるに何しさえ春氏
たれ乃色の告一つの兎す　よ子

いつまでも阿の山色香の梅の花
む影はしきぬる春比もろ人　小竹 正忠

久方のてほこ月もう色の香耳
のもとに手毎帝阿けの玉垣　田中 親友

色香き香にさこのかこもる梅比大れ
帝かも根き一比春や変る岸　はらまく

梅枝

梅枝の八重咲すゑつゑ咲そひて　則子

梅梢

君の代や引き延べくらす神垣の　松本維善

梅幣

ちゝゆゑの八重さかりなる梅の枝　松島実正

梅錠

旭新てゝ生ゆる梅の枝乃　陸子

梅衣

水上のうゝ処のをを中の蓋の　能博

いろたゝ乃袖のをるゝ乃重

二月梅

砂とゝのゝゝる市代乃まとてゝ紀きゝゝよの

ゝゝらくゝちてもゝ多ふ梅の盃　平照滋

庭前梅

高宮の古りゝ梅乃古の一の三

神余あり　菅谷厚定

梅落衣

淺可ゝ数古信ゝ世あるうめ乃古

ゝゝつの神ふるもあるかゝるや　山本權

梅老

神さゝやるゝゝへたゝ毫ゝる山の結二

落琴上

ひゝの神ゝく古ゝ毫も散ゝのゝるゝん　植松永貞

寒老

ゝゝ高宮をゝゝ梅乃追風す

常高元

あゝりも旬ゝ元れの木宮下　沖子

紅梅白雪
香ふ天

くれなゐを咲くこそ雪とこそうめを
のもりもおもしろ神垣の内　厚見王　正常

風揺
白梅柔

かもれとそ風や吹く梅の文ふ
まくゝ玉のふくゝ玉のふくゝ玉　屈沢安都之

對梅
憶昔

咲る花枝ゝも遠ゝ花の匂ふ　延女

梅下
言志

伊勢ゝ物語ひ　青山永保

開みふくゝ色の匂ふ色多きをの
きみ花をこの枝みさ枝とも

梅恋

天つ空むつ山のきの梅の香を
ふきこそ風のおとつきて　源勢女

梅恋
祈恋

かゝ君も神の市垣乃うめ花
のもとゝもあかくいのる恋の路　厚見王　正志

梅恋
待恋

梅の花さかりをすぎてうくひす
あゝはぬはらし来おもひあり　安田頼方

梅恋
旅り

こゝ夕べこの雪はさそ花ゝ
むすふこの袖の袖乃うちみや　多の子

梅恋
旅泊

さそ花乃ゝ海乃面はのをゝ江寺
うめ吹の花をる須ケ社寺風　貞惟

梅恋
述懐

開こゝ夕べのめくる春乃宿かる多も
ゝくゝきりのこ塔のくゝ　丸

寄書
祝民

吹風のかぐさあぬけ世をこぞりて
あのめでたき書面高砂民の　青埜　香

寄書
祝國

神のきかぬ匂ふうめをおろこひを
くつやる國乃栄にあそし　高井　酋継

寄書
祝君

こゝ君ふいた実ぬしためとつおせも
さの之栄梅乃花咲みたり　中川　秀実

寄書
祝神

ゐも書やみを年のまさみ多年こ
つくる世あらし神恒のうめ　関　守一

寄書
神祇

たこの神やあ乃ことに自年うめの恵
神の恵こかぬ乃ことのうれり　石黒　千尋

世ゝ榮久みゐ乃
つゝ乃ゐ乃　和ゝ乃榮　飴本　咏彦

集ゝ　ゝ乃れこ
ゝの世世も

梅の春面
百ゝ言ゝ　言葉乃
ゐやの耳

さこの中久
ゐゐ乃

世年ゐゝ
ゐ年ゐ　勧進主
高橋冨兄

すゝ花取集めゝる歌字悉く紙ゟきれ
をかしきこそ殊の外なる一冊

神さびぬ梅さき〳〵し
百年代すぎし後も梅の
花の深染香も
世に伝ふこの言の葉ぞかし

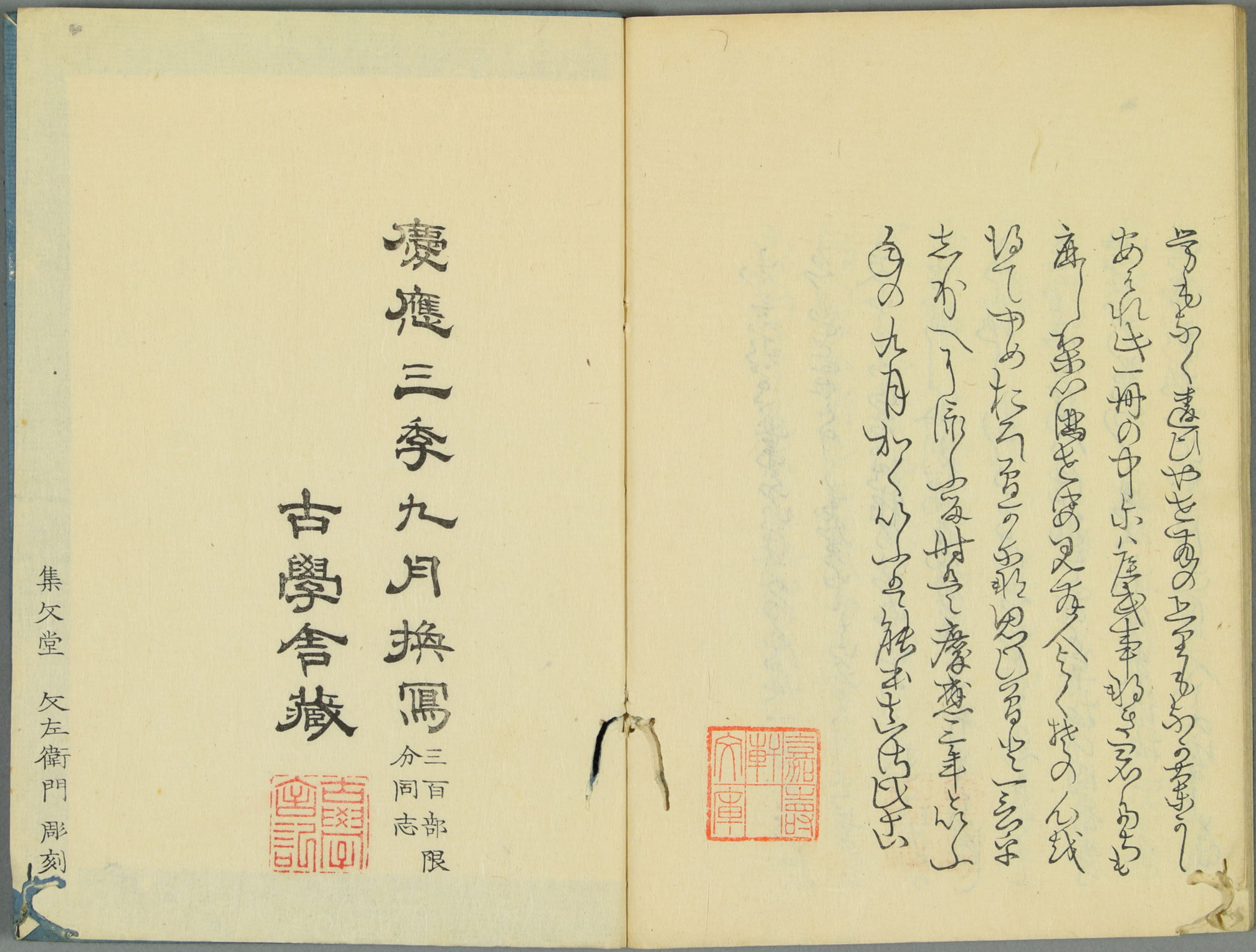
久米 [illegible]

刊詠梅二百首跋

今年孫兵衛月の十日余り一日より始
始めて筆記し去る初冬尾上を
切おこし思ひ立し席にて巻をば成すに
速やかに先かし出来たる詠草にて大雲種
をしまみ立派に藻の作にもいるまで
天満大神大宰府の御名の下にこそ梅の祭り
なるを是し書来なし 元治元年月廿日余り言

[illegible]
あれば毎月人梅乃和歌を添もらまる
きし[illegible]
る曲をて寸[illegible]
拙の集へし[illegible]
写一とて毎[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
友[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]



慶應三季九月換寫三百部限
分同志

古學舍藏

集文堂　文左衛門　彫刻

東京三井銀行
古典會報
大民報國